

2005. 11. 17

加速度～ G. マラー交響曲第10番よりアダージョ」

時間というものの速度は常に一定であるとは限らない。

現代に生きる我々は、かつて経験したことのない加速度を体験している。その加速度が、時間の速度も変えていないと、誰が言えよう。

我々は膨大な質量や体積を有する新たな物体を「創造」し、それを利用し、操っている。それらの創造物は、進化を止めた我々自身の肉体を乗せて、次第に加速しながら我々を未知へと連れ去ろうとしている。我々自身が退化をはじめたら、それをなお操りつづけることなどできなくなるだろう。

あらゆるものをコントロールするために組み込まれたCPU。その原資であり創造物である記憶装置。

それらは、驚くほど多数の、いや、殆んど全ての創造物を制御している。すなわち、我々の手足の代替物である、飛行機、自動車、鉄道などの乗り物。我々の自律神経の代替物である空調装置、生命維持装置など。我々の脳の代替物であるCPUや記憶装置そのもの。などなど・・・。

既に我々が有し得るものは「意思」だけになっている、と言えないだろうか。

一昔前、人間の滅亡は、黙示録にあるような「天からの火」によって生じるだろう、と、すなわち、人間が作り出した水爆のような「兵器」によって起きるだろうとされていた。今ではむしろ、これまでに何度もあったような「隕石の衝突」や「地球環境の激変」、あるいは人間自身の引き起こす環境の激変によって起きるだろう、と思われている。しかし、実は、我々自身の退化と、我々の創造物が獲得する加速度——このふたつの相互作用から起きるのだ。

「我々はどこから来たのか。我々とは何か。我々はどこへ行くのか。」（ゴーギャン）

この曲が放つ鮮烈な不協和音は、我々自身と、我々の生み出した無数の創造物との、いかにしても避けることのできぬ軋轢を「予言」している。